

## 米作りは水と共に

明治になり、地租改正が実施されると、用水路の権利義務をめぐる訴訟がしばしば起こりました。これをきっかけに「水利土功会」という広範囲な組織が結成され、それが発展して「神安普通水利組合（現在の神安土地改良区）」になりました。神安水利組合は次第に農業用排水に関する一切の問題を取り仕切るようになっていきました。

明治以降も、長い間摂津市域の中心産業だった米作りの様子は、昔からあまり変化がなく、手数のかかる作業が繰り返されてきました。しかし、近年になって急速に機械化され、すっかり変わってしまいました。



牛と田かき・代かき（大正末期・味生）

田植え前に、牛にウマグワを引かせて田をならしている



水車踏み 井路の水を田へ揚げる



田植え

腰をかがめてのつらい仕事



稲木にかけて干される稲（昭和38年）

正雀本町一丁目から南東方向を望む



稲刈り（昭和39年） 鳥飼八丁



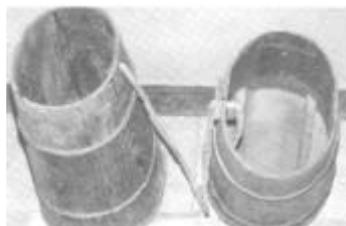
**河原樋（鳥飼下）の改修工事（大正13年）**  
淀川の水を引き入れるためには、大きな工事が必要だった。背景に見えるのは藤森神社と参道の松並木。河原樋は今も使われている



**ひえ抜き・草取り（昭和30年代中頃）**  
除草剤が使われるようになるまでの草取りは、暑さの中での重労働だった

## なんば

市域では泥田が多く、足が深くめり込んでしまうのを防ぐためにはいた



おけなんば



いたなんば



**井路で遊ぶ子ども（昭和30年代中頃）**  
まだ水はきれいだった。魚もいた（鳥飼野々）

## 思い出語り

「米という字は八十八回手間をかけて作るという意味だ」といわれていましたが、昔の米作りは大変な仕事でした。みんながやっていたからできたようなもので、もう一度やれと言われてもとうてい無理です。

泥田での作業は牛もいやがります。足はめり込むし、腹まで泥に浸かるからです。アゼ道から離れる方向に行くのは特にいやがります。逆にアゼに向かうときは早く歩こうと力を出します。

害虫が発生する8月初め頃に「田の虫送り」をやりました。鳥飼全村が日と時間を合わせて、各家から一人づつが火の付いたタイマツを持って、アゼ道を行列するのです。列の先頭はカネを叩きます。よその村の行列もよく見えて、すばらしい夏の風物詩でした。

肥料にする下肥を取りに天六辺りまで行くのです。荷車に肥オケを積んで牛に引かせます。牛も道を覚えてしまって、勝手にちゃんと歩いて行きます。

日照りが続くと、山田川も市場池も干上がってしまいます。そうになると、地下水を必死で汲み上げるのです。